

夏目漱石『門』論

——宗助・御米の日常を中心に——

上
總
朋
子

一

『門』は、明治四十三年三月一日から六月十二日まで、全百四回にわたり東京・大阪両「朝日新聞」に連載され、明治四十四年一月、春陽堂より単行本として刊行された。『門』研究史においては、宗助や御米の個々の罪意識などを深く掘り下げた論文であっても、論者は宗助・御米の関係の有り様、また二人の関係が作り出す世界に必ず言及していく傾向が見られてきた。そして導かれる見解においては、『門』の世界の捉え方は大きく明暗に振幅してきた。

興味深いのは明暗に振幅する見解のうち、明るさを見る立場、暗さを見る立場それぞれにおいて、これまでに特に注目されてきた見解の発表時期が、同時期であることである。まず『門』連載とほぼ同時期に、武者小路実篤がこの作品を「じめく」とした生気を消してゆくやう⁽¹⁾な作品であると評した。この武者小路の評と同時期に、一方で谷崎潤一郎が、宗助・御米を「まことの恋によつて永劫に結合した夫婦」とし、それこそ「幸福に生きる唯一の道」で、「我々もならう事なら宗助のやうな恋によつて、落ち着きのある一生を送りたいと思ふ」と評している⁽²⁾。

次いで注目されるのは、小宮豊隆と江藤淳の見解と考えられる。小宮豊隆は『漱石全集』の解説において、「『門』の世界は、初めからはじめじめしてゐて、暗くて寒くて侘しい世界でなければならなかった」と武者小路の批評をひく形を以て言及した^③。これに対して同時期に江藤淳は、次のような批評を出している。

「門」からぼくらのうける印象は少くとも罪の因果応報の物語のそれではない。ぼくらは、この小説から呪われた姦通の罪に戦く夫婦の姿を描き出しはしないのである。(中略) 実際漱石は他のどの作品に於ても、これほどしみじみとした夫婦の愛情を描いたことはなかった。

江藤は『門』を「理想主義的な夫婦愛」の物語と読むその他には「正当な読み方はない」と断言までしている^④。このような『門』評の並立的対立的な発表のされようは、『門』の世界をどう捉えるかの困難さを充分に物語っていると見えよう。

このような、『門』の世界をどのように捉えるかに関して見解の振幅を見せていた研究史において、一つの転機を与えることになったのが、西垣勤氏の論考であると考えられる。西垣氏は江藤の「理想主義的な夫婦愛」の世界という見解を詳細に否定された上で、次のように述べられた。

この作品は、社会への視野と生活——多様な人間関係の中に身を置きそのはげしい葛藤の中で生きる生活、を失った平凡な人物が、密室状況の中でどのように生きてゆくか、生きてゆくことによってその日常性そのものの中でどのようにに人格を腐蝕させていくか、それがかつてあった(とされている)二人の間の愛をさへどのようにに裂けさせてゆくか、を問いかける実験的な意図によるものであるということになる。

西垣氏は、夫婦の「裂け目」こそ注目すべきとされ、また「愛の破産」を強調されたのである^⑤。西垣氏の論考以降、『門』が夫婦の愛の物語であるという見解は否定され、そしてまた、かつては愛があったとしても、物語の現在においては夫婦の「裂け目」が顕在化していく様相が描かれているという見解、つまり『門』の世界に「暗」を強く読む見解が、ほぼ定説となつている。

そのような現在の論調にありながら、一方で、西垣氏以降強調される「裂け目」の存在を認めた上で、谷崎潤一郎や江藤淳が評したように、『門』の夫婦の日常に明るさを見出すことを否定できないとする論も発表されている。片岡豊氏は、

冒頭の対話を眺めてみると、そこには双方の存在があるがまさに受け入れている男／女の（理想的な愛の形）と呼ぶべき姿をさしあたって見届けることができるのではないか。顔を向け合わない、あるいはまなざしを交わし合わないという対話のありようも、へいま・ここにあるそれぞれの存在自体が閉ざされた空間の中で睦み合っているのであれば、その必要もないのだ。

と指摘され、「二人の間の裂け目」を新たな角度からどれほど突きつけられようと、いまだ僕は「理想とする夫婦愛の物語」「幸福な恋愛の物語」というフィルターをはずすことができないでいる」という一読者としての読後感と、近來展開される「裂け目」の存在を強調した論との齟齬から出発した『門』論を展開されている^⑥。また平岡敏夫氏は、

一面に蒼く澄んでいる東京の「綺麗な空」、障子の中での細君の裁縫、「おい、好い天気だな」がそのまま通じる夫婦のつなが

り。この冒頭の魅力が魅力として受容できなければ「門」という作品はもう読者には無縁というしかないだろう。

と、宗助と御米の「自然な親和力」を注目され、「二人の真率・穏当な生息」こそが『門』の魅力であると指摘されている。これらは夫婦の日常における平穏なありかたこそ、『門』の世界においては重要であるという見解である⁸⁾。現在においても、『門』の世界の捉え方は未だ明暗に振幅をしていると言い得るのではないだろうか。

『門』は宗助・御米夫婦の日曜日の描写から始まる。次第に彼等の過去が明らかになり、夫婦それぞれが内に抱える問題が浮かび上がり、そして宗助が山へ参禅に赴くというように展開していく。注目すべきことは、最終的に宗助は非日常の場であった山を下りて、御米の待つ日常へと帰還していくことであろう。本稿においては、宗助が御米との日常のうちに帰還していくことを重視し、そこから日常性に『門』の主体があるのではないかという見通しのもと、夫婦の日常における関係の考察を進めていくことにする。そのことにより、先に見てきたように見解が振幅し続ける『門』の世界の再考察を試みていきたい。

註(1) 武者小路実篤「五月雨」(『東京朝日新聞』一九一〇年七月十八日)

(2) 谷崎潤一郎「門」を評す(『新思潮』一九一〇年九月)

(3) 小宮豊隆「解説」(新書判『漱石全集』第九卷 一九五六年七月 岩波書店)

(4) 江藤淳「門」——罪からの遁走(『三田文学』46巻7号 一九五六年七月 三田文学会、のち『決定版夏目漱石』一九七四年一月 新潮社、引用は『漱石作品論集成第七巻 門』一九九一年十月 桜楓社 一八〇—一九頁)

(5) 西垣勤「門」(『国文学』10巻10号 一九六五年八月、のち『漱石と白樺派』一九九〇年六月 有精堂出版、引用は『漱石作品論集成』四二頁)

(6) 片岡豊「和合同棲」のための〈男〉の条件——夏目漱石『門』の宗助——(『作新国文』第11号 一九九九年 作新学

院女子短期大学国文学会編 二五～二六頁)

(7) 平岡敏夫『門』(『国文学 解釈と鑑賞』第66巻3号 二〇〇一年三月 至文堂 一一一頁)

(8) その他、近年においては、佐藤泉氏が、「不安」と表裏であることを指摘されながらも、宗助・御米の日常は「幸福で『魅力的』と評されている。(『漱石 片付かない〈近代〉』二〇〇二年一月 日本放送出版協会 一三七頁)

一一

『門』の冒頭部分で、宗助・御米は既に一緒になってから六年が経過している夫婦として登場する。そして過去六年間にあつた様々な出来事が作品の展開に従つて明らかになる。京都の大学の学生であつた宗助は、親友安井を裏切り御米と一緒になろうとした結果、宗助と御米はそれまでの居場所を失い、京都を離れ、広島、福岡と転々とするようになった。その後上京し現在の崖下の家に転居し、約二年が経過したというのが、作品の現在の時間の開始点である。

六年を重ねてきた二人の関係は次のように描かれている。

社会の方で彼等を二人限に切り詰めて、其二人に冷かな背を向けた結果(中略)外に向かつて生長する余地を見出し得なかつた二人は、内に向つて深く延び始めたのである。彼等の生活は広さを失なふと同時に、深さを増して来た。彼等は六年の間世間に散漫な交渉を求めなかつた代りに、同じ六年の歳月を挙げて、互の胸を掘り出した。彼等の命は、いつの間にか互の底に迄喰ひ入つた。二人は世間から見れば依然として二人であつた。けれども互から云へば、道義上切り離す事の出来ない一つの有機体になつた。二人の精神を組み立てる神経系は、最後の纖維に至る迄、互に抱き合つて出来上つてゐた。彼等は大きな水盤の表に滴つた二点の油の様なものであつた。水を弾いて二つが一所に集まつたと云ふよりも、水に弾かれた勢で、丸く寄り添つた結果、離れる事が出来なくなつたと評する方が適當であつた。(十四の二)

宗助と御米は恋愛事件を起こしたが、それが契機となり、「社会の方で彼等を二人限に切り詰めて、其二人に冷かな背を向けた」という状況に追いやられていった。そのため「水に弾かれ」た「二点の油」が「丸く寄り添つ」て離れられなくなったとあるように、互いに互いだけを関係を深くする対象とするしかなかった。外圧によって出来上がった特殊な関係であろうとも、宗助と御米の居場所は最早、二人が作り出すその関係の中にしかありえなかつたのである。海老井英次氏は、このような宗助・御米夫婦の関係について次のように指摘されている。

ここには人間が〈愛〉という名で呼び得る最も至福の関係が実現していると見てよいであろう。人が人を〈信頼〉して築く〈愛〉の関係の最も原形的なものにして十全なものとこれを認めてもよいであろう。人間にとつての〈信〉というものが、ただ一人の人を相手にしても十全に生きられること、人間として誰か一人が〈信〉じられれば、それで充分なのであり、宗助御米の二人はまさにそうした人間の〈信〉の理想的状態を生きていることになる⁽¹⁾。

海老井氏が「ただ一人の人を相手にしても十全に生きられること」の重要性を指摘されるように、始まりは消去法的であつたとしても、現在の二人には、互いに互いが間違ひなく必要であり、まさしく海老井氏の指摘されるように「それで充分」なのであり、それだけ一層二人の関係は、「世間に疎い丈それ丈仲の好い」「人並み以上に睦ましい」、「一つの有機体」(以上十四の二)のような関係になり、また「和合同棲といふ点に於て、人並以上に成功した」(十三の五)関係となつているのである。

『門』には「洋燈」の下で寄り添う夫婦の姿が度々印象的に描かれる。

夫婦は例の通り洋燈の下に寄つた。広い世の中で、自分達の坐つてゐる所丈が明るく思はれた。さうして此明るい灯影に、宗

助は御米丈を、御米は又宗助丈を意識して、洋燈の力の届かない暗い社会は忘れてゐた。彼等は毎晩かう暮らしていく裡に、自分たちの生命を見出してゐたのである。(五の四)

彼等は「夜中燈火を点けて置く習慣が付いてゐる」(七の二)のであるが、それは何時でも「洋燈」の光の届かない暗い社会から逃れ、二人の世界に安住しようとする、言い換えるならば「洋燈」の光の下での二人丈の生活に充足と安心を見出そうとしている彼等を象徴してしよう。始めは社会から弾かれたことから互い丈を相手にせざるを得なかつた二人であつたが、六年経過した現在となつては、社会との関係から逃れながら、「洋燈」の光の下だけを「明るく」思うという、閉鎖された空間のうちに平穩を見出し日常を送つてゐるといふありかたが浮かび上がつてくるのである⁽²⁾。

しかしながら彼等のこのような関係に、問題が無い訳ではない。彼等は「自己の心のある部分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潜んでゐるのを、仄かに自覚しながら、わざと知らぬ顔に互と向き合つて年を過した」(十七の二)というように、「結核性の恐ろしいもの」をそれぞれの内部で自覚しながらも、それを見ないように、それに絡め取られないようにして生きてきたのである。それは、二人にはそれぞれお互いしか存在しないという日常を過すための、必然であつたと言える。この「結核性の恐ろしいもの」とは、瀬沼茂樹氏が「過去の罪過」「不治の罪過」と指摘され⁽³⁾、清水孝純氏が「心の奥にひそむ、増殖性ある罪の意識の暗喩」と指摘された⁽⁴⁾。佐藤泰正氏はさらに詳しく、

結核性の——『明暗』の医師の診断によれば、治癒の不可能な精神の暗部は、宗助とお米を唐突に吹きたおした大風、かれらが運命の陥穽と観じつづけたものの根源であり、漱石はそれを「自由と独立と己れとに充ちた」(こゝろ)、いいかえれば、

近代の洗礼を受けた人間の固有の病巣と信じていたにちがいない。

と指摘されている⁵⁾。知らぬ顔をして日常を送っていても、宗助と御米の心の内奥で、増殖しながら、過去に犯した「罪」への意識は存在し続けていたのであり、作品内の時間が進むにつれて、この「罪」意識は彼等の意識上にはどのようなになり、二人の関係にも影響を及ぼすようになる。次節でこの彼等の「罪」意識について考察してみたい。

註(1) 海老井英次〈「罪」の揺曳へ信頼〉のゆらぎ——夏目漱石「門」に於ける〈信〉の世界」〔敍説〕7 一九九三年一月 敍説社 四七頁)

(2) 尹相仁氏は、「ランプの灯には、本質的に住居空間を凝集させる性質があると指摘され、「精神的な安らぎを求める者にとつて、ランプの灯ほど住まいの内密を保証するものはない」と述べられている。〔世紀末と漱石〕一九九四年二月 岩波書店)

(3) 瀬沼茂樹「門」〔夏目漱石〕近代日本の思想家6 一九六二年三月 東京大学出版会、引用は『漱石作品論集成』三四頁)

(4) 清水孝純『漱石イメージ辞典』〔夏目漱石事典〕一九九〇年七月 学燈社 二二七頁)

(5) 佐藤泰正「門」のなかの子ども——「門」再説——〔日本文芸論集〕15・16合併号 一九八六年十二月 山梨英和短期大学国文学研究室編 桜楓社 二五八頁)

二二

宗助・御米夫婦の「罪」は、次のように書かれている。

二人は夫から以後安井の名を口にするのを避けた。考へ出す事さへも敢てしなかつた。彼等は安井を半途で退学させ、郷里へ帰らせ、病氣に罹らせ、もしくは満洲へ驅り遣つた罪に対して、如何に悔恨の苦しみを重ねても、何うする事も出来ない地位に立つてゐたからである。(十七の一、傍線引用者)

傍線部から分かるように、事実としての宗助・御米の「罪」とは、安井を裏切つて一緒にになり、安井をかつての地位から転落させていつてしまったことに纏わる「罪」と言える。しかしながら、宗助・御米それぞれの「罪」に纏わる意識はそれぞれ個別の問題を呈示している。

御米の場合を考えてみたい。御米の「罪」意識は、自分が子供を産めないことを宗助に告白する場面に顕著である。御米の告白は次のようなものであった。

御米は三回身籠もるが、流産、早産、死産と全てその子供はこの世に生まれてくることは無かつた。三度目の不幸な経験の後、易者の門を潜つた御米は次のように宣告される。

貴方は人に対して済まない事をした覚がある。其罪が崇つてゐるから、子供は決して育たない(十三の八)

この易者の言葉を聞いた御米は、「心臓を射抜かれる思」(同)をしてゐる。ここで易者の言う「罪」とは、御米が安井を裏切り、宗助と一緒にたつたという、まさしく、安井に対して「済まない事をした」という「罪」である。しかし、何が御米を最も呵んでゐるのかと言へば、その「罪」そのものではなく、「罪」が「崇つて」、「子供は決して育たない」ということである。柄谷行人氏は「子供ができない御米は、それを彼女の行為に対する「天罰」として受けとめてゐる」と指摘されている⁽¹⁾。柄谷氏の言われるように「天罰」が下り、「子をなすことが出来ない自分」を

突きつけられることの中においてこそ、御米に「罪」は意識されているのである。そして「罪」と「天罰」とどちらが御米に切実であったかと言えば、それは「天罰」の方ではないのか。御米が「疾から貴方に打ち明けて謝罪まらう」と思つてゐた」と宗助に言い、「私にはとても子供の出来る見込はないのよ」と言つて「泣き出」す姿（十三の四）から、それは窺えるのではないだろうか。

告白後の御米は、長い間内に秘めていた彼女の「罪」意識を宗助に告白したことにより、現実において何らかの慰藉を得たと考えられる。

御米はさも心地好ささうに眠つてゐた。つい此間迄は自分（註——宗助）の方が好く寐られて、御米は幾晩も睡眠の不足に悩まされたのであつた。（十七の六）

このように、以前は不眠に悩まされ、身体の不調を度々訴えていた御米であるのに、宗助への告白後は身体の調子も上向きになり、安眠出来るようになってゐる。また最終部で、「本当に難有いわね。漸くの事春になつて」と「晴れぐし」く春の到来を喜ぶことの出来る御米（二十三）の姿からも、彼女の心の憂いは軽減されていることが分かる。宗助に告白した後、御米に変化が見られるということからは、宗助との関係性において御米の「罪」、並びに「罰」の意識は、薄らいでいったと言ふことが出来よう。

次に宗助の「罪」意識を考えていきたい。彼が安井に対する「罪」を意識する様子は次のように描写されている。

（註——安井を想像して）斯様に墮落の方面を特に誇張した冒険者を、頭の中で拵へ上げた宗助は、其責任を自身一人で全く負はなければならない様な気がした。（十七の四）

ここで注目すべきは宗助が「其責任を自身一人ですべて負はなければならない」と思うことである。安井に対する「罪」は宗助・御米の二人によるものであった筈が、宗助の「罪」意識においては御米の存在が欠落しているのである。こののち、宗助が御米に安井の影の接近を何も語らずに参禅に赴くことにも、そのような宗助の「罪」意識の片鱗が窺える。このような「罪」意識の有り様には、宗助のエゴイズムを見出す事が出来、宗助の「罪」意識は、正しく自身の「罪」に対峙したものは言い難いのである。

また安井との邂逅の可能性を引き金にして、動揺し、街を彷徨う宗助は次のように描写されている。

彼は胸を抑えつける一種の圧迫の下に、如何にせば、今の自分を救ふ事が出来るかといふ實際の方法のみを考へて、其圧迫の原因になつた自分の罪や過失は全く此結果から切り放して仕舞つた。(十七の五)

この時宗助は、自分を不安にさせる「圧迫」と、「罪や過失」は「全く」「切り放して」しまっているが、この後すぐ、この圧迫を取り払うため参禅に向かうことから、参禅は自分自身に「罪や過失」を突きつけて考えるためにされたのではなく、無論「罪」からの救済が目指されたのでもないと言える。内部から、明確には捉えきれない何かが宗助自身を脅かし、「弱くて落付かなくつて、不安で不定で、度胸がなさ過ぎで希知」(十七の五)な状況に宗助を追いやった。宗助の参禅はそのような現在の自分の状況から脱し、「安心とか立命とか」(十七の五)といった境地に向かうためのものであったのである。

註(1) 柄谷行人「解説」(新潮文庫版『門』一九七八年七月改版 新潮社 二二九頁)

四

宗助の参禅は、江藤淳が、

参禅とは、単数の人間の、人間からの絶縁の意志の表明にほかならない。贖罪を表看板にして円覚寺の山門をくぐった宗助は、実は自己を抹殺して一切の人間の責任を回避しようとした卑劣の徒にすぎない。

と痛烈に批判している^①。また瀬沼茂樹の「初めから凡人にすぎない男が一夕の参禅によって安心立命をうる捷徑などはない」との指摘^②があるように、従来完全なる失敗に終わっているとの評価がなされてきた。確かに宗助の参禅は、前節で指摘したように、自らの「罪や過失」を正しく見つめるものではなく、ただ「安心とか立命とか」(十七の五)のために志されたものであったために、老師の出す「父母未生以前本来の面目」(十八の四)の公案に苦しむ結果になったのは、当然の帰結と考えて差し支えないであろう。しかし宗助が参禅の中で何も得ることなく下山したのかと言えば、そうとも言い切れないのではないか。以下で詳しく見ていくことにする。

老師に「父母未生以前本来の面目」(十八の四)という公案を与えられた時、宗助は「父母未生以前といふ意味がよく分らなかつたが、何しろ自分と云ふものは必竟何物だか、其本体を捕まへて見ろと云ふ意味だらうと判断」した(十八の四)。この公案を宗助が、自分の存在の根源について考えよと翻訳したことには大きな意味があるだろう。参禅以前宗助は、髪結床の鏡に映った自分を見て、「此影は本来何者だらうと眺めた」(十三の一)ことがあった。この時はまだ安井の影が宗助に近付くことはなく、平穩は保たれていたにも関わらず、宗助は自分の存在への不安を表し

ている。また宗助には、「歯の根」が「丸で腐つて」おり、「到底元の様に繋る訳には」いかないが、根本的な治療せずに終えたことがあつた（五の三）。さらに安井との邂逅の可能性を前にした時には、宗助は自身を「根の締らない人間」（十七の五）であると認識し、「心は如何にも弱くて落付かなくつて、不安で不定で、度胸がなさ過ぎて希知」（同）という不確かな自分を実感している。このように、自己の存在の不確かさは、御米との平穩な日常を送る宗助の内部にも以前から存在するものであり、常に問題とされるのではないもの、宗助の意識上へのほつて来ることがあつた。そのような宗助であつたために、「父母未生以前本来の面目」を「何しろ自分と云ふものは畢竟何物だか、其本体を捕まへて見ろ」と解釈したのである。そして、日常では深められることのなかつた「自分と云ふもの」の「本体」、つまり自己存在への問いが、参禅でなされていくのである。

佐藤泰正氏は、「門」の意味するところを「存在の門」と指摘されている^③。宗助は参禅において、与えられた公案に対して見解は得られなかつたが、佐藤氏の指摘されるように、まさしく「存在の門」、自己の存在の根源への問いという「門」を前にして、「彼は門を通る人ではなかつた。又門を通らないで済む人でもなかつた。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であつた」（二十一の二）というように、自己存在への問いから逃げてまわることは出来ないという自己の有り様だけは、理解して帰ることになつた。それは即ち、「罪や過失」をも含めた、自己の存在を問い続けなければならないということである。この認識に至つたことこそ、宗助の参禅の意義と言えるだろう。

註(1) 江藤淳 前掲論文（一九頁）

(2) 瀬沼茂樹 前掲論文（三五頁）

(3) 佐藤泰正「門」——その主題と方法」〔日本文学研究〕第十五号 一九七九年 梅光女学院大学日本文学会 一一二頁

五

宗助は非日常とも言える山中から日常へ帰って行った。帰還した日常とは、御米との関係性が主となる。そのような日常でこそ、宗助がし続けなければならないと理解した自己存在の問いかげが、その後なされていくのである。このことは次の箇所から窺える。

御米は、(中略)

「いくら保養でも、家へ帰ると、少しは気疲が出るものよ。けれども貴方は余り爺々汚いわ。後生だから一休したら御湯へ行つて頭を刈つて髭を剃つて来て頂戴」と云ひながら、わざ／＼机の引出から小さな鏡を出して見せた。

宗助は御米の言葉を聞いて、始めて一窓庵の空気を風で払つた様な心持がした。(二十二の一)

非日常の山中の空気から抜け出せずにいる宗助が、御米の持つて来た鏡によって、自分自身のそのような有り様を照らし出され、御米の言葉によって日常に回帰した実感を得る。この構図は宗助の問題が日常で照らし出され、問われていく象徴と言えるであろう。

『門』最終部には、春の訪れの中、聞こえてきた鶯の鳴き声に関する「坊さん」と「商人」の会話がある。

「まだ鳴きはじめだから下手だね」

「え、まだ充分に舌が回りません」(二十二)

この会話を銭湯で聞いてきた宗助は、御米に「此鶯の問答を繰り返して聞かせた」(同)のであった。この宗助の行動に関しては、深江浩氏が「(註—宗助は)「麗らかな日影」がいつまでも自分たち夫婦を包みつづけてくれることを願っていたに違いない」との指摘をされている⁽¹⁾。深江氏の指摘の通り、まさしく平穩な幸福な日常的一幕と言えらるであろう。この深江氏の指摘に加えてこの情景は、春の訪れの中で、新たに何かへ動いていこうとすることに關係する、宗助の変化の一証左になりうるのではないだろうか。認識を新たに帰還した日常において、今はまだ「はじめ」故に「下手」で、充分には上手くはいかないが、これから、問題は問い続けていくのだという宗助の認識が、鳴きはじめの鶯と自己とを重ねていると捉えられ、春の訪れの中、その話を御米に「繰り返して」聞かせるところには、やはり御米との日常のうちで、問題が問われていくことを表しているのではないだろうか。

宗助の参禅は明らかな成果は得られなかったが、参禅する中で、「門」は「敲いても駄目だ。独で開けて入れ」と言う声は聞こえてきた(二十一の二)。全て独りの力で対処しなくてはならないこと、そして観念では問題は解決していかず、問題は問い続けなければならないことを確認して宗助は日常へ帰って来た。そのような宗助が、最終部において、以前とは違う姿を見せることは重要である。

「漸く冬が過ぎた様ね。貴方今度の土曜に佐伯の叔母さんの所へ回つて、小六さんの事を極めて入らつしやいよ。あんまり何時迄も放つて置くと又安さんが忘れて仕舞ふから」と御米が催促した。宗助は、

「うん、思い切つて行つて来よう」と答へた。(二十三)

ここで注目すべきは、御米の催促に対し、宗助が「うん、思い切つて行つて来よう」と実行の意を明確に表明して

いることである。以前の宗助は、小六の問題をどうするかのやりとりの際に、「まあ其内何とか（註——叔母の方から）云つて来るだらう。夫迄打遣つて置かうよ」と言い（四の二）、再び催促されると「うん、行つても好い」位な返事をする丈で、其行つても好い日曜が来ると、丸で忘れた様に済ましてゐる」のであった（四の二）。二十三節において実際に宗助が叔母の家へ行つたかどうかは明らかではないものの、四節での返事からは明らかに変化を見て取れる。また宗助が最終部で、「日曜の午」（二十三）に銭湯に行つていることも注目に値するだらう。以前は、日曜には、「朝早く起きて何よりも第一に綺麗な湯に首丈浸つて見様」と思うが、そのうち「面倒」になり惰性の様に先送りしているのが常であり、そして二、三ヶ月も日の高い内に銭湯に行つた事は無かつたのであった（三の二）。ここでも「面倒」な心持ちを起さずに日常において物事を実行に移す宗助の変化が見て取れるのである。以上のような宗助の姿からは、生に潜む暗い部分だけを見つめていくのではなく、それを抱えながらも日常において更に何らかの行動をしていこうというような、向日性をも見出していくことが可能であらう。

越智治雄氏に次の指摘がある。

病んだ部分を秘めてなお平穏な幸福な日に恵まれているのも、われわれの生の実体なのではないか。『門』の日常性は、まさにかかるとの奥行きをもつた漱石の目に支えられて、ほとんど象徴性にまで達している¹²。

越智氏の指摘されるように、宗助・御米の日常の奥には、「病んだ部分」が秘められ、それが次第に彼等自身に意識されるようになってきていた。しかしながら、それでもなお、確かに彼等の日常は「平穏な幸福な」ものに違いない。それは、最終部における宗助、御米の姿から理解出来る。

御米は障子の硝子に映る麗かな日影をすかして見て、

「本当に難有いわね。漸くの事春になつて」と云つて、晴れ々しい眉を張つた。宗助は縁に出て長く延びた爪を剪りながら、

「うん、然しまたちき冬になるよ」と答へて、下を向いたま、鍬を動かしてゐた。(二十三)

御米は「晴れ々しく」「眉を張」り、「麗かな日影をすかして見て」、「本当に難有いわね。漸くの事春になつて」と春の到来を喜ぶ。そして自らの内部から問題を突きつけられ続ける象徴とも言える、「長く延び」てくる「爪」を、「下を向いたま、鍬を動かし」続ける宗助は、冒頭部のように、「秋日和」の陽光に「眩しくなり」背を向けてしまふ(一の二)のではなく、つまり自らの暗部に深く沈潜していく方向性ではなく、「麗らかな日影」の差し込む「縁」にいる(明示されてはいないがおそらく宗助は日に背を向けてはいないであろう)。最後の宗助の「うん、然しまたちき冬になるよ」という言葉には、従来宗助の認識の暗さが指摘されてきたが、重松泰雄氏は、「このフィナーレにおける宗助の認識は確かに暗いが、しかし他面その風貌のうちに、心なしか諦観の落ちつきのごときものを感じる」と指摘されている^③。重松氏の指摘される「落ちつきのごときもの」は、参禅で自らの対峙すべきところを理解し、帰つてきた日常において、何か新たな決意を感じさせる宗助の姿を考え併せると理解出来るのではないだろうか。このような二人の姿からは、やはり『門』の収束地点においては、平穏で幸福な日常にこそ主体がかけられ、そこに更なる明るさがあるとさえ言い得るのではないだろうか。

註(1) 深江浩『「門」論』(『日本文学』24巻4号 一九七五年四月 日本文学協会、のち『漱石長篇小説の世界』一九八一年十

月 桜楓社、引用は『漱石作品論集成』九二頁)

- (2) 越智治雄「門」(「共立女子大学短期大学部紀要」一九六五年十二月、のち『漱石私論』一九七一年六月 角川書店、引用は『漱石作品論集成』四四頁)
- (3) 重松泰雄「漱石 その歷程」(一九九四年三月 おうふう 一三八頁)

※本文引用は全て『漱石全集』第六卷(一九九四年五月 岩波書店)に拠った。但しルビは省略した。

(かずさ ともこ・関西学院大学大学院文学研究所博士課程後期課程)